

提言

「日本思想史学の成立と展開」をめぐる

藤原 暉

私は、平成十二年度日本思想史学会大会（於、東北大学で「戦後の日本思想史研究の前提」という題目で発表した。その趣旨は戦後の思想史研究（就中、「実学」の研究

は戦前における思想史研究の諸課題（村岡典嗣思想史他の戦中から戦後にかけての研究課題をも踏まえたもの）を「正当に受け止め、乗り越えてきたのか」という点にあった。聴衆は少なく関心も示されなかった。

ところが翌年の平成十三年夏、東北大学大学院の日本思想史研究室の主催による夏季セミナーは「日本思想史学の成立とその特質」と題するものであった。このセミナーの内容報告は今年三月『年報日本思想史』創刊号という冊子で公表されたので内容を観察する事は容易に出来た（実は桐原健真論文の別刷を送ってもらったので知ったのだ

が……）。中心のテーマである「日本思想史学の成立」のもとに以下の発表がなされた。

高橋章則「書物は何を語りかけるのか——『読書の文化史』から『読書の思想史』へ」、渡辺和靖「保田與重郎における『血統』觀念の形成」、田尻祐一郎「『神話』と『公共性』——津田左右吉の『国民』論」、見城悌治「近代日本における『偉人』表象とその思想史的検討——三宅雪嶺の人物論」（この発表については後述する）であった。一読して、高橋発表には共通テーマを矮小化しているのではなかろうかとの感想を覚えたし、渡辺発表からは思想史学自体の成立には関係ないのではとの印象を抱いた。レットルに謳った課題に関係しそうな田尻発表はアプローチの魅力に比較してその発表状況はあまりにも少な

く、期待して読んだ割りには距離を感じた。

この「夏季セミナー」とは依然としてこんなものなのかとその虚飾性すら感じたのである。

そうした折に丁度「提言」への原稿の依頼が入った。

「思想史学の成立」

関連した講義の聴講は別にして、私がこの問題考えたのは古川哲史・石田一良編『日本思想史講座別巻2 研究方法論』（雄山閣、昭和五十三年）であり、中でも梅沢伊勢三「日本思想史学の成立」であった。言うまでもない事であるが、この著には津田左右吉、和辻哲郎他の思想史学者への論評や石田一良「日本思想史の特殊性とその座標軸」という論稿なども収められていた。「日本思想史学」を日本における思想上での胎動、成立、発展展開を叙述したものとして正に一つの思想史研究として提示されたのが梅沢論稿であった。

勿論、私は梅沢説に全面的に賛成したのでもなく、不満も多く持った。が、以後、思想史研究上、思想史学の成立の一つの「典型」的な作品として受け止めるようになった（なお、梅沢には「思想」という用語自体の成立についての論稿もある）。

梅沢説への不満の一つは、明治期（思想史学への胎動）

に關してであった。この分野では丸山眞男「近代日本における思想史方法の形成」（『西欧と日本』下、東京大学出版会、一九六七年）の近代思想史の方法の成立をめぐる論稿があつたからである。そこでは明治文明史観に内包された「思想と生活」、「ヨーロッパと日本」という軸で把握する思想史方法が、以後、同時代的思想史、国民道徳的思想史を経て、明治末期から大正初期にかけて文化史的思想史、生活史的思想史、さらには唯物史観的思想史の五段階に展開していく様相が指摘されていた。しかも、特に「これらの五つの典型は同時に前の段階の問題意識の直接的な継承」とされていたからでもあつた（私にはこの丸山論文は戦後早く発表された御自身の「福沢に於ける実学の転回——福沢諭吉の哲学研究序説」という論文に対する「ある弁明」でもあつたのではとの印象が強いのであるが……）。

また、梅沢説には特に胎動期に關係する資料・「啓蒙書術書」として、竹越与三郎の『新日本史』、高山樗牛の『明治思想の変遷』さらには三宅雪嶺の『明治思想小史』などは紹介されていなかったからである。

梅沢説にこれらの思想史の叙述が欠落しているのは、単なる好悪からの見落としとは考えられない。それは、村岡典嗣思想史学の形成をまつて、日本の思想史学は成立

したのでという学問史への信念から選別されたものと考えられるのである。

さて、先述した夏季セミナーに考察を戻そう。

まず、このセミナーではこうした先学の「日本思想史学の成立」に関する視点はない。

それは兎も角として、私の目をひいた発表は見城悌治「近代日本における『偉人』表象とその思想史的検討——三宅雪嶺の人物論」であった。発表の趣旨は民間史

学者の雪嶺の「英雄論」は、特権化し独裁容認化して行くであろう方向でなく「大正デモクラシーの一翼を担っていく」ものであったという点にあった。個別的な雪嶺研究としては意味深いであろうが、私には夏季セミナーの主題に即した発表として、どうしても納得出来ないものを覚えた。どうして、三宅雪嶺の場合に「明治思想小史」などが取り上げられないのか不審に思えた。

というのも、以前から私はこの点などを発表してきたからである。

論を進める必要上、少し『明治思想小史』にふれておく。雪嶺研究の先学に本山幸彦解説『三宅雪嶺』（筑摩書房、一九七五年）がある。そこでは大正二年に刊行されたこの本について「題名は明治思想小史であるが、雪嶺自身の明治全般にわたる政治思想の展開を下敷きにした

……思想の変遷を論評したもので……客観的な思想史というよりも政治思想評論である」とした。私はこの指摘を否定はしないが、「思想史」という研究上のチームの形成とそれをもって明治時代を振り返って時代区分した把握方法に魅力を感じて来た。それは「思想」という用語の成立とその歴史とを融合したチームでなければとえられない歴史対象へのアプローチが提示されていたからである。

なお、「思想」というチームの思想上の成立について一言しておく。通常、「今日の『思想』は社会や人生に対する一定の見解を意味するが、明治時代はまだ、『思』と『想』の文字通りの『思い』『考え』の意味であった」（惣郷正明・飛田良文編『明治のことは辞典』（東京堂出版）とされている。しかし、西欧思想の影響を受け後の翻訳語「思想」に連続する用語「思想」は明治七年の小川為治「学問の法」に「第五編思想ノコトヲ論ズ思想ノ理／思想ノ益／思想ノ方法」と現れ、明治十七年には「蘭学ヨリ発生セル新知識、政治ニ波及セル新思想」（藤田茂吉「文明東漸史」）が、明治二十五年には「社会、思想の変遷」、「維新革命に関する根本思想」、「社会的革命、思想界の三文鼎足」（竹越与三郎「新日本史」）などと完全に成立しているのである。蛇足ながら、大槻文彦『大言海』には

「思想」の項目がなく、『国語大辞典』（小学館）には「思想史」の項目がないのである。

さて、『明治思想小史』（大正二年刊）は第一章「明治以前」の叙述から「思想」という表現が多用されている。

「思想の変遷を精しく言えば際限がないが……明治の名称に於て時代を限る以上、国家を主にし社会に及ぶを適當とする、国家に関し社会に関し間断なく思想の変遷し來つたが……国内よりするを縁とし、国外よりするを因とする」と言う。ここの「思想」は交通の頻繁から国外からの思想と同化しようとした傾向が強かつた開化期に對して、その同化に不適応な狀況を自覺し、それを踏まえた自説の展開であつた。その日本的な思想の流れを第二章では「尊皇攘夷の思想」、第三章「維新の思想」と展開する。つまり明治の思想の縁を江戸期の動きに求め、思想史的に把握したものである。彼を「日本人の哲学といふものを書かれたのは雪嶺先生だけでは」と長谷川如是閑は批評したが、それはここにも表れていよう。

私は特にこの書の「第十六章 和学漢学洋学」を取り上げ、そこにいわゆる「和漢洋（学）」としての終焉を発見した雪嶺を再認識し、近代における「実学の転回」としての思想史の叙述を注目した論稿を書いた（「実学とは日本学——三つの開化を通して（一）、（二）」『明治聖徳記念学会

紀要』三十三、三十四号、平成十三年八月、十二月）。が、その際にまたその前提作品として高山樗牛「明治思想の変遷——明治三十年史総論」との位置関係をも注目したのである（断つておくが、私は国家・国粹主義者ではない）。

雪嶺はこの章の前の十五章で「主義主張」を論じ、その冒頭に「明治に入つて、色々と主義の争いがあり……何の方面にも何等かの主義の聞くものがあつたが、近來主義として掲げられるのは甚だ少なく……頗る漠然たるものである」とした。これを受けてその次章には冒頭に次のように述べる。

主義を立るは信ずる所あつての事であるが、信ずるに程度がある、一生を委ねやうとするのがあり、単に是認するのがあり、多分宜ささうとするのがあり、色々ある、普通に知識と称するは種々の程度のもを混合し、可もなし不可もなしという部分が多い。学問として修むる所は知識の分量が多いにしても只記憶して居文なのが大部分である。

右の文の後に雪嶺は明治維新以後「和漢洋三学の旗幟が鮮明」になり、やがて和学は神道と国文学に、漢学は儒学本来の政治の道に、技術学としての洋学を連携させて展開した。しかし「今や和漢洋といえは古めかしい」と明治思想史上における三学の終焉を指摘した。雪嶺が

こうした批判の対象とした「…主義」という分析概念を用いた前例の一つが高山樗牛の『明治思想の変遷——明治三十年史総論』であった。

樗牛は明治の国民思想の変遷を四期に分け日本思想と外来思想との交渉関係から論じた。「日本思想」というのは「神道、儒教（漢学）、仏教」であり、外国思想は「功利主義、自由主義、国家主義、博愛主義（基督教）」として「欧米思想」の傾向を指していた。ここでは「主義」が個々の思想傾向を示し、大きく「外国思想」という形で包含されていた。すでに、樗牛においては「思想」は成立しており、その「変遷」が自覚化していたのである。周知の彼の「日本主義」の主張は新たに彼によって変遷過程を乗り越えるために唱導されたものである。樗牛が明治三十年を振り返って行った思想の変遷把握の後、雪嶺が明治四十五年を振り返った時には、新たに「新聞題社会主義」、「無政府主義」を付加し、また「主張」といった意味で「自暴自棄」「進化論」「女性論」などを問題化している事である。

いずれにしても、雪嶺の明治思想史の叙述は同時代思想史的な叙述ではあるが、明治二十年代から三十年代にかけての時代状況（日清、日露の両戦争を経過した）を踏まえて、学問の成立、衰退、転換を対外的な交渉と関係付

けながら、樗牛的な「国民思想」の主張を超えて客観的自覚的に思想を把握しようとした産物であった。

先述した夏季ゼミの全体討論を読んでみると、見城発言にはやや思想史学と今回の発表の関係が出ているので、ゼミの中心課題へのアプローチの意識はあったものかとは思いますが右のような指摘はない。また、こうした私の指摘を読まれた梅沢自身は今日いかに受け止められるだろうか。

なお、誤解はないと思うが、この論考で私は梅沢論考への批判などしようとしてはいない。ただ、村岡思想史学の成立をもつて一典型とした場合、そうした成果自体も思想史研究の対象となっていくという事である。最近「頂点思想家」などと言うが、村岡典嗣思想史自体も頂点思想家となつて分析されるという事である。そうなる個人の思想家の分析方法が深く関係してくる事にもなる。さて、そうした個人思想家の分析方法として、私はその典型を「石田一良『生活と思想——文化史学における思想史的研究の課題と方法・試論』（『国民生活史研究』3）吉川弘文館、昭和三十八年）に求め援用してみる。村岡氏の本居宣長国学への学的関心が自覚化し、やがて「ロゴスとしてのアウグスト・ベエクの文献学理論」に行き着き、それが互いに強めあつてそこに「思想史学」が形成され

たという事になる（言うまでもなく村岡学を取り巻く「生活としての思想」の中に明治維新以来のそれまでの思想史への胎動、就中「国学」への関心が作用しているはずである）。

典型の継承と再構築

日本思想史学は国史学、国語学、国文学などに比して若い学問であると言われてきた。こうした後進を自覚しつつ前述の典型を基盤に自学の成立と展開を図ってきたのである。先述した講座にその成立が論じられ、各種の隣接諸学との関連をもとに指摘された事自体、日本思想史学の成立を物語るものであったと考える。従って以後の展開においてはその成立形態に如何に対応し、継承し展開させるかにあった。

私のささやかな場合をみると、それを「日本学」というエリア・スタディの形で受け止めた。それは自分の所属した大学の研究教育組織の構成上の問題でもあったが、それよりも村岡思想史学から石田文化・思想史学の継承展開を図った点にある。特に、村岡思想史学からはもとも南蛮学―蘭学の影響を受けて研究したが、やがて日本における日本学者（例えば、チェンバレン）やアジア協会の研究など数多くの日本学の形成についての示唆を受

けた。村岡―石田思想史ラインでは、特に平田国学におけるキリスト教受容（石田説・神基督合説）で再編していたのである。

今日、国史学が日本史学、国語学が日本語学、国文学が日本文学へと展開・転回してきている。それは正に国際化の時代性の反映であり、学問の普遍性への要請による。こうした時期を先取りして来たとも言えよう。

そういう立場で今日の状況に一言を挟むならば、今日ほど自学の伝統と転回の問題に真摯に立ち向かうべき時期はないのではなからうか。

やはり、「あるべき方向」としてまず二つのディメンションがある。それは叙述されてきた「典型」には歴史的思考と哲学的思考があった。この二つが融合していた（しようとしていた）のである。しかし、この点は前々から多くの思想史研究者が異口同音に指摘していた事であるが、哲学的思考に偏った事にある（勿論、その因は歴史的思考が瑣末な資料研究で行き詰まった事にもあったが……）。

次に、「目に見えるもの」（数字も含めて）への依存が大きく、「目に見えないもの」への関心が少なくなった事である。「日本思想史学の展開」のためには、この二つのバランスある回復が必要なのではなからうか。

今回の夏季セミナーの救いと感じた事は、前述した『年

報『日本思想史』の終わりに掲げられた「全体討論」、しかもその最後の部分である。第一、第二、ときて第三の部分である。そこには次のような叙述があつた。

村岡文献学の方法論（「認識されたものの再認識」と従来の日本思想史学に関する批判を展開している様々な方法……を踏まえた上で日本思想史学の方法論を再考しようという試みについてである……

と。最後の最後に出て来たこの発言である。これは今回のセミナーの最初において志向されるべきものであったのでは……。

「認識されたものの再認識」という事はよく発言される事であるが、一体、何が／如何に／認識されているのか……。そしてその「再認識」とは如何なる認識なのかという事を先ず問うべきではなからうか。

そうした意味で高橋発言にある「村岡の文献学的方法は実はテキストに対して詳細な書誌学的検討を研究者に求めていた」という事は当たり前の事であつて、その事の指摘だけでは課題の解決にはならない。村岡書誌・文献学自体の持っている課題を如何に克服するのが問われるべきであらう。

村岡思想史学は最後の講義録を明治維新にもつてきていた。そこには明治以後の思想史学的展開は江戸時代に

すでに準備されていたという認識からはじまっている。それ以後の村岡講義が聞きたいところであつたが……。我々は戦後の思想史研究の原点をこのあたりからはじめるべきであらう。

今日、成果を急ぎ、名声への道を求める研究者が多い。自ずから自己主張のための研究、分析のための分析を求め、自己の思想史研究を正当化する事に懸命になっている（ひどい場合には考古学だけでなく、虚像、虚飾、捏造への道を辿るもの……）。

日暮れて、なお遠き研究の道を旅行く老兵の提言として受け止めて戴ければ幸いである。

（岩手大学名誉教授）